

せいけん
詩集

第三十篇

作：近藤せいけん

「恋文 三」

小田急線本厚木駅徒歩五分 とあるビルの前
毎週土曜日 午後四時過ぎ 若者が待つ
少女ヴァイオリンケースを抱えて

いつものように やつて来る

今日の少女は なぜか足取りが軽い

若者が微笑みながら 待っていた

「読んでくれましたか」

「はい読みました ありがとうございます」

少女がはにかみながら 微笑んだ

「はい これ」と白い封筒の 手紙を 手渡した

そして 少女はビルに入つてゆく 若者は小躍りしながら

駅に向かう 駅前のベンチに腰掛ける

手紙の封を切る 自己紹介の後 藤村の詩が書かれていた

「やさしき白き手をのべて 林檎をわれにあたえしは

薄紅の秋の実に 人こひ初めはじめなり」

若者はこみ上げる 気持ちを抑えられなかった

若い二人の 恋という名の

一ページが始まった